

広報 ちくしの

人権問題特集号

【人権尊重のまちづくりスローガン】
「自分が人からされたり 言われたりしていやなことは、自分には人にしない 言わない。」



コロナ禍の中で・・・。

新型コロナウイルスへの不安から、人を排除したり中傷したりする事件も起きています。しかし、心あたたまる出来事もあります。

2つの応援メッセージは、人の優しさやあたたかさを伝えてくれています。

「がんばれ かもだほいくえん」高知市の鴨田保育園の玄関に励ましのメッセージが書かれた応援旗が掛けられていました。一人の保育士さんがコロナウイルスに感染し、園はしばらく休園。再開の朝に寄せられた匿名の激励に、さまざまな不安を抱いていた所長や保育士の目には涙が光っていたそうです。



2枚の写真は、筑紫野市内の子ども会の子が高齢者施設を訪ね、寄せ書きや横断幕を見せしている様子です。寄せ書きには、「職員みなさんも、いつも大変でしょうががんばってください」「高れい者のみなさんもコロナウイルスに負けず、これからもがんばってください」と、横断幕には「はなれているけど、つながっているよ」と書かれていました。毎日緊張感をもっていた職員の方も、高齢者も笑顔いっぱいになったそうです。



目次

- 感染症を引き起こすのは「ウイルス」、人ではありません …… 2
- 「痛み」を重ねながら …… 3
- ありのままに …… 4
- 体罰によらない子育てを広げよう …… 5
- 人がつながる豊かな言葉 …… 6
- ワンチーム …… 7

2020年



12/1

感染症を引き起こすのは「ウイルス」、人ではありません ～新型コロナウイルスによる差別をなくそう～

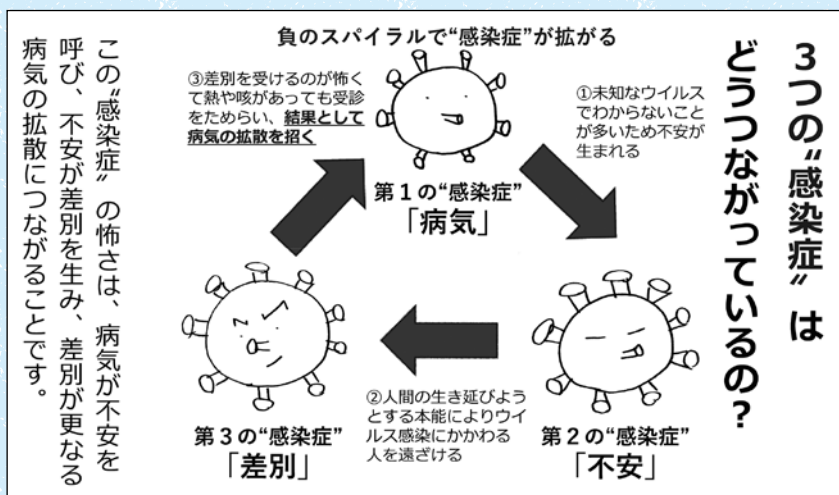
今年のはじめから、世界中で新型コロナウイルス感染症が大流行しています。日本でも生活や仕事、子どもの教育にも大きな影響を与えながら、今も依然として収まる気配はありません。外出や人と会うことが制限され、イベントが中止になり、これまでの日常が一変しました。

そのような中、感染した人やその家族だけでなく、医療に従事する人々やゴミ収集の方、長距離ドライバーの方等、社会生活を支える人たちに対して心ない言葉が向けられたり、排除されたりする差別が起こっています。

見えないウイルスへの恐怖と差別

こうした差別の発生について、今年の3月に日本赤十字社から「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう～負のスパイラルを断ち切るために～」というガイドが発表されました。

このガイドを見てもわかるように、新型コロナウイルスは私たちの目に見えず、有効な治療薬やワクチンもまだありません。このようにわからないことが多いと、私たちは不安になり、恐怖を覚え、冷静な気持ちを失ってしまいます。その不安や恐怖を遠ざけるため、感染した人やその家族だ



日本赤十字社 「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう～負のスパイラルを断ち切るために～」

けでなくさまざまな人に心ない差別の言葉を浴びせ、遠ざけることで安心しようとしてしまいます。しかし、このような差別をすることが、受診することをためらわせ、結果的に病気の拡散を招くことにもなるのです。

私たちが新型コロナウイルス感染症を乗り越えていくため、そして差別のない社会を実現していくためにも、こうした負の悪循環は、断ち切らなければなりません。

感染症を引き起こすのはウイルスです

「ウイルス」に対して気をつけることは、国・県・市や医療機関から発信されています。「人」を差別することで遠ざけ安心することは間違ったことです。このような差別は、絶対に止めなければなりません。

ウイルス発生から1年近くが経過し、国が提唱する「新しい生活様式」も広まってきた現在、感染した人や家族、医療従事者を励まし支え、共に乗り越えていこうとする動きも各地で起きています。差別することで人とのつながりをなくすような生き方をするのか、励ますことで人とつながる生き方をするのか、コロナウイルスが私たちに問いかけているのではないのでしょうか。

「痛み」を重ねながら ～差別の問題を自分のこととして～

「こんな混んでいるときにわざわざ来なくてもいいのに」

ある年の正月のことでした。車いすを利用していた父を連れて、近くの神社へ母と妹と私で初詣に行きました。神社には3段ほどの石段があり、父の乗った車いすは重く3人では持ち上げることができませんでした。そこで、私たちが、参拝客へ「誰か車いすを抱えるのを手伝ってもらえませんか」と声をかけたとき、冒頭の言葉が突然父に浴びせられました。

父のこと

父は、50代半ばに、「*脊髄小脳変性症」という病に冒されました。運動機能が次第に麻痺し、リハビリのため入院をしました。

入院して半年以上が経ち、外泊が初めて許されました。父は、家に戻って来るのを楽しみにしていました。そんな思いで出かけた初詣で浴びた予期せぬ言葉に、父は何も言わず、参拝もせず、そのまま家に帰って行きました。この日以来、病院から家に戻ってきても、父が外に出ることはありませんでした。そして、5年後、病気が進行し、亡くなりました。



「痛み」への共感

今思えば、病気の宣告を受けてしばらくの間は、私も変わっていく父を受け入れることができませんでした。凜として歩いていた父が、病気を患ってからは車いすがないと移動することもできなくなり、ベッドから車いすに乗せるだけでも大変でした。思うように言葉が出せなくなった父に対して、私も、冷たい言葉を何度も浴びせてしまいました。

しかし、初詣で「こんな混んでいるときにわざわざ来なくてもいいのに」という言葉を直接聞き、「どうしてそんなことを言うんだ」と思いました。参拝しようともせず帰って行く父の背中から、父の苦しさ、悲しさ、憤りが伝わりと同時に、わが身をしめつけられるような自責の念にかられました。「差別」の問題を初めて自分のこととして感じ、その「痛み」を自分のこととして考えることができた瞬間でした。

この出来事以降、私は、父の姿をありのままに受け入れることができるようになったと感じます。「何を言っているのかさっぱり分からん」と突き放していた父の言葉をしっかり聞こうとするようになり、父のことを考えながら車いすを押すようになりました。父のおかげで少しは優しくなれたように思います。

「嫌だなあ」という思いやなかなか人には伝えにくい辛さは、誰もがもっていることでしょう。「差別」の問題に出会ったとき、当事者の思いに自分の「痛み」を重ね合わせることで、初めて「差別」が自分の問題になるのだと思います。そして、「痛み」に共感できる自分を感じたとき、以前よりも豊かな「自分」と出会い直せる、そんな気がします。

*脊髄小脳変性症…小脳や脊髄が障がいを受けることから、歩行時のふらつき、手の震え、思ったように言葉が出ないなどの症状が出現する。日本において難病指定を受けている疾患の1つ。

ありのままに～自分らしさを表現できる世の中に～

娘の夢

娘がこの春美術大学に進学しました。長い間アートに興味があるものの何をしたいかが今一つ明確になっていなかった娘でしたが、現在の彼女には夢があります。それは、友人のウエディング衣装を作るという夢です。その友人にはパートナーがいて、どちらも女性の同性同士のカップルです。その二人に似合うウエディング衣装をデザインし、プレゼントするのが今の彼女の夢です。



出会いと学びを通して

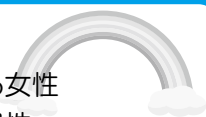
娘は中学校時代にとっても貴重な体験をしました。それが、今の彼女の価値観をつくり、将来の希望にもつながっているように思います。

中学生時代、娘は大切な友人から「体の性」と「心の性」が違うことを打ち明けられました。しかし、そのこと自体は娘にとって大きく心を揺さぶる出来事ではなく、むしろ、その友人を取り巻く環境が刻一刻と変化していく様子に、これまでの価値観を大きく揺さぶられたようでした。

まず、学校では、LGBTQに関する学習が行われました。性の多様性について、知識面の学習に加え、当事者の話を聞く場も設定されました。学んでいくに連れて子ども達は自分自身の性についても考えるようになったようでした。「自分の好きな性はもしかしたら同性かもしれない」「私はよく考えたらまだわからない」等、友人同士で話すこともあったようでした。また、子どもの話をきっかけに家庭で話をされたのか、当事者の生徒が希望する制服の寄付もありました。その人らしさを大切に作る動きが生き生きと展開されていく様子に、親である私もこれまでと違った視点で物事を考えることができるようになりました。娘の人権感覚を育ててくれたのは、まぎれもなく出会った仲間と、学びを与え続けてくれた大人たちのおかげだと私は思います。

LGBTQとは

- L(レズビアン) …………… 同性を好きになる女性
- G(ゲイ) …………… 同性を好きなる男性
- B(バイセクシュアル) …… 同性も異性も好きになる人
- T(トランスジェンダー) … 体と心の性が一致しない人
- Q(クエスチョニング・クィア) … 性自認や性的指向が明確でない人



性の多様性を受け入れて

この出来事を通して、私自身のこれまでの言動が、多くの人を傷つけてきたことにも気づかされました。「彼氏(彼女)はいるの?」「結婚はしないの?」等、性に関する話題に関して、その重さを感じることなく当たり前のように投げかけてきた自分がいたように思います。

若い世代は多様性の学びを重ねて成長しています。そして、私たち親世代もまた、新しい学びによって、自分自身の感覚を問い直し、修正していくことができることを実感できました。

誰もが安心して自分らしさを表現できる世の中にするために、まずはこれまでの当たり前について家族や友人と一緒に考えてみませんか。

体罰によらない子育てを広げよう ～子どもの命と権利が守られる社会へ～

子どもへの体罰は法律で禁止されています

現在、児童相談所への児童虐待の相談件数は増加の一途をたどっており、子どもの命が失われる痛ましい事件が続いています。の中には、保護者が「しつけ」と称して暴力・虐待を行い、死にいたらしめるものもあります。

こうしたことから、体罰を加えてはならないと新たに明記し、改正された児童福祉法等が2020（令和2）年4月1日から施行されました。

こんなことしていませんか？

こんなことが体罰です。暴言などの子どもの心を傷つける行為もやめましょう。

- 言葉で注意したけど言うことをきかないので、頭をたたいた。
- 宿題をしなかったので、夕ご飯を食べさせなかった。
- いたずらをしたので、長時間正座をさせた。
- 「お前なんか生まれてこなければよかった」など、子どもの存在を否定するようなことを言った。

体罰等によらない子育てのポイント

安心感や信頼感、あたたかな関係が心地よいのは、子どもも大人も同じです。次のことを心がけましょう。



- 子どもの気持ちや考えに耳を傾けましょう。
- 子どもの良いところ、できていることを具体的にほめましょう
- 子どもの好きなことや楽しく取り組めることなどを考え、やる気にさせましょう。

子育てはいろいろな人の力とともに

子どもの権利が守られ体罰のない社会を実現していくためには、私たち一人ひとりが意識を変えていくとともに、子育て中の保護者に対する支援を社会全体で取り組んでいかなければなりません。悩んでいそうな方がいたら、相談にのったり自分の子育ての経験を話したりするなど、地域社会全体で支え合っていきましょう。また、市町村が提供している子育て支援サービスも積極的に活用しましょう。



☆困ったときは、次のところへご連絡をしてください

- 筑紫野市家庭児童相談室「092-921-1308」
- 児童相談所相談専用ダイヤル「0570-783-189」
- 児童相談所虐待対応ダイヤル「189」

人がつながる豊かな言葉 ～その言葉、だれかを悲しませていませんか～

ある日の出来事

私（母）が夕ご飯の準備をしていると、1人ではいるはずの中学1年生になる息子が誰かと会話しているのが聞こえました。気になって息子に話しかけました。

母 「誰と話しているの？テレビゲームをしているんじゃないの？」

息子 「同じクラスのA君。ゲームをインターネットに繋げて、A君と一緒に相手を倒すんだ。」

そう言うと、息子はゲームを始めました。

A君 「相手が変な動きをしている。キチガイじゃない？」

息子 「確かに、キチガイやね。」



私（母）は、そんな会話をしながらゲームをする息子を見て、ドキッとしました。ゲームが終わった後、息子にさっきの会話について聞いてみることにしました。

母 「さっき、ゲームをしているときに聞こえたんだけど、キチガイっていう言葉はどういう意味で使っているの？」

息子 「変な行動をとる人に対して、ふざけるなみたいな感じで使っているかなー？」

母 「キチガイっていう言葉は精神的な疾患をもつ人を差別することに繋がる言葉なのよ。」

息子 「えっ？そうなの？この言葉はインターネットの動画配信でも使っている人がいるよ。」

母 「そうね。インターネットでは間違った言葉の使い方がたくさんされているわ。お母さんはね、あなたには、自分の使う言葉にどんな意味があるのかを理解して、責任ある発言ができる人になってほしいと思っているわ。」

「誰かが使っていたから大丈夫ではなくて、知らない言葉と出会ったときに、『使ってもいい言葉だろうか』『誰かを傷つける言葉ではないか』という疑問をもって、確かめる力をつけてほしいの。」

息子 「そうかー。知らないって怖いね。A君にも話してみるよ。」

言葉でつながる人と人

ここ数年、小中学生から聞こえることが増えた「キチガイ」という言葉は、昔は何か熱中する人のことを指す言葉としても使われていました。現在では差別に繋がる言葉としてメディアでも使わない言葉になっています。それは、日常的に使われていた言葉に対して「おかしいのではないか」という声があがり、社会の人権意識が高まり、使うべきではない言葉として変化していったからです。

差別に繋がる言葉はインターネットを中心に増え続けています。私たち一人ひとりが人権意識をもち、差別的発言を許さない姿勢をもつことで、人を不快にしたり傷つけたりする言葉は減っていきます。言葉は人と人がつながる大切なものです。みんなが笑顔になる、豊かな言葉でいっぱい社会をつくっていきましょう。

ワンチーム ～外国人も私たちが住みよいまちに～

多国籍のラグビー日本代表

「いけー」「あぶなーい」「やったー」

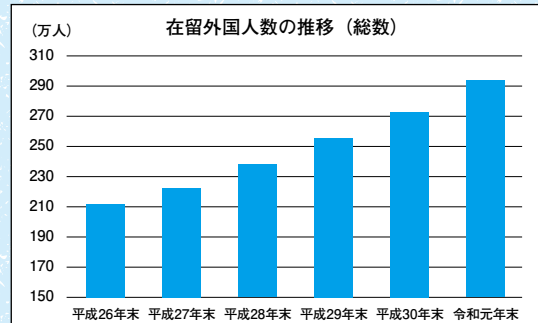
テレビを見ながら小学生の娘が一喜一憂しています。そこには快進撃するラグビー日本代表が映っていました。2019（令和元）年日本で開催されたラグビーワールドカップは、日本中を熱くさせました。

普段、スポーツ観戦には興味がなかった娘も夢中にさせたラグビー日本代表は、さまざまな国の選手で構成されています。これはラグビー特有のルールで、決まった条件をクリアすれば、国籍にかかわらず所属している地域のラグビー協会の代表になれるのです。はじめは外国人選手が多くいるチームを日本代表といえるのかという疑問を抱きましたが、日を追うごとに、こういう形が、日本の、大げさに言えば世界のあるべき形なのではないかと思うようになりました。

日本に住む外国人の現状

政府統計（在留外国人統計）によると、2019年12月末現在、日本で暮らす外国人は約293万人、総人口の2%超を占め過去最高となりました。下記のグラフのように平成26年末からの5年間で約81万人（約38%）の増となっています。福岡県は約8万3千人、筑紫野市では約650の方が暮らしています。現在は、コロナ禍で減少していますが、近年は外国人観光客も多く、街中で見かける機会が多くなりました。コンビニ等で働いている外国人も多くなり、私たちの生活に身近な存在となっています。

しかし、接する機会が多くなったことで言語や文化、生活習慣などの違いから生じる誤解や偏見によって、人権にかかわる問題が起こっています。人権に国境の壁はないはずなのに外国人にとって住みやすい社会にはなっていない面があると感じます。



※平成26年末からの5年間で約81万人（38%）の増となりました。
（法務省発表資料）

個性を重ねるワンチーム

私は、お互いの文化や価値観の違いを認め合い、同じ地域に住む仲間としてお互いを尊重し安心して暮らせるまちが、外国人も私たちが住みよいまちであると思います。

「ワンチーム」

これは、みんなが同じ一つのものになるという意味ではなく、それぞれの個性が重なり合いみんなで同じ方向を向くという意味だと思ったとき、私の中でラグビー日本代表チームに対する違和感はなくなりました。

ラグビー日本代表のように多様性を受け入れるには、まずお互いを知ることから始まるのだと思います。例えば笑顔であいさつをしたり、困っている外国人を見かけたらこちらから声をかけたりする。そんな小さなパスの繰り返しですが、交流となりお互いの理解となり、受け入れ、支え合うまちづくりへ走り出すことにつながるのだと思います。みんなでレッツTRY！（＾＾）



広報ちくしの「人権問題特集号」 12月1日号アンケート用紙

(当てはまるものに○をつけて下さい。)

- ①「人権問題特集号」は・・・ よかった まあよかった あまりよくなかった よくなかった
- ② 心に残った内容は・・・ 「感染症を引き起こすのは『ウイルス』、人ではありません」
「『痛み』を重ねながら」 「ありのままに」
「体罰によらない子育てを広げよう」
「人がつながる豊かな言葉」 「ワンチーム」

③感想をお聞かせ下さい。

人権問題特集号 アンケートのお願い

新型コロナウイルス感染防止のため、毎年開催していましたが人権問題を考える市民懇談会も今年度は中止となりました。それだけに、今回の「人権問題特集号」は、大きな意味をもつものと考えています。

つきましては、市民の皆様には是非読んでいただき、よろしかったら感想等を届けていただきますようお願いいたします。今後の編集に生かしていきたいと思っておりますので、趣旨をご理解のうえご協力を重ねてお願いいたします。

※アンケート回答の方法

- ①FAX：上のアンケート用紙に記入のうえ以下の番号にFAX下さい。
⇒FAX番号：(092)923-9644 筑紫野市役所教育政策課 宛
- ②郵送：上のアンケート用紙に記入のうえ以下の住所にご送付下さい。
⇒〒818-8686 筑紫野市石崎1丁目1番1号 筑紫野市役所教育政策課 行
- ③メール⇒ jinkendouwa@city.chikushino.fukuoka.jp
- ④市ホームページのアンケートページ
⇒



QRコードを携帯電話・スマートフォン等で読み取るとアンケートページにつながります。

★ 編集後記 ★

今年は戦後75年目の節目の年にあたります。敗戦後、人々は厳しい生活環境の中にも懸命に働き、戦後復興をなし遂げました。一方で日本は、当時の先進国から「人権赤字国」と揶揄されていた時もありましたが、さまざまな人々の粘り強い働きかけの結果、今では多くの人々が人権問題に向き合うようになってきました。しかしながら、解決しなければならない問題がたくさんあることもまた事実です。

今後とも、一人ひとりが自分にできることを行い、先輩方が切り開いてきた人権が大切にされる社会をさらに発展させていきたいですね。

2020年12月1日発行

広報ちくしの「人権問題特集号」

■編集発行

筑紫野市

筑紫野市教育委員会

筑紫野市同和教育研究会

筑紫野市同和問題啓発資料編集委員会

■問い合わせ先

筑紫野市教育委員会教育政策課

TEL:(092)923-1111

■印刷

株式会社 コーユービジネス